

コメント：越境，をめぐる雑感

崎 山 政 毅

1990年の10月，最後の日曜日，中米ニカラグア共和国の北西部，ホンジュラスとの国境にほどちかい町チナンデーガの野外市場でのこと。その2月には大統領選で11年間にわたったダニエル・オルテガ大統領を戴くサンディニスタ革命政権が野に下り，内戦は一応の「終息」を見せていた。野外市場といっても，「公認」のものではない店も混じっている。「ブラック・マーケット」という言葉が思い起こさせるかもしれない湿った空気は微塵も感じられない。商人たちのテント張りの露店の周囲に「インフォーマル商人」の背空露店が列をなしているような場だった。フィールド・ワークの合間に，市場を冷やかしにぼくは出かけたのだが，そこで声をかけられた。

「おおい，^{セニョール・チニート}中国人の若旦那！」

「え？ ぼくのことかい？」

「他の誰がいるっていうんだ。あんたのことだよ，中国人の若旦那」

「ぼくは日本から来たんだよ」

「^{ハボネス}日本人か！ だったらなおさら話が早い。ソニーのコンボを買っていないか。日本人ならソニーがイカシテいるのはよくわかっているだろう？」

「何でニカラグアでソニーを買わなければならないんだ？ 日本でも売っているのに」

「こちらの方がずっと安いよ。ホンジュラス製だぜ。日本人なら金持ちだろ？ トヨタ [トヨタ]，ニッサン，ソニー，イタチ [ヒタチ] ……」

「ぼくは金持ちじゃないさ。金持ちだったらニカラグアなんかに来ないよ」

「ハハッ，ちがいない。で，どうだね，ホンジュラス製だからニカラグア製なんて目じゃないぜ」

「ええと・・・ホンジュラスにはソニーの工場は

ないはずだけれど（ニカラグア製のソニーなんて聞いたこともないぜ）。それ，もしかして密輸品か？」

「ハッハッ。だから安いソニーって訳だ。どうだね？ 俺も家に二台持っているんだが，すごくいい調子いいぜ。何でも聞けるんだ，そうだろ？」

「まあ，たしかに・・・でもいらないよ」

「ああっ，もったいねえ！ せっかく安いソニーが買えるってえのに。まあいいさ。

ところでこちらにはイタチもあるんだが・・・。このソニーのコンボよりもいいやつが」

「それもホンジュラス製か？」

「いいや，こちらははるかコスタリカからやってきたのさ」

「戦争 [内戦] のあいだもホンジュラスやコスタリカからそうやってソニーやイタチを持ち込んで商売していたのかい？」

「そうさ。戦争は戦争，商売は商売，だからな」

「国境を超えるのは危なくなかったか？」

「そこところはいってこと。で，買っていないか？」

「ぼくのうちにはもうソニーが五台あるからいらないよ」

「五台も！ へえ，やっぱり日本人は金持ちだな。だったら六台目のソニーかはじめてのイタチはどうだい？」

漫才のようなのだが，これがぼくが覚えている限りでの「じっさいのやり取り」だ。早口のニカラグア・スペイン語で，（陳腐な比喩だが）機関銃のごとくまくしたてるメスティーソの商人と，こわれたスペイン語でこたえるぼくの会話は，じっさい漫才のように響いたらしい。ぼくら二人を周りの店番の連中や客たちが取り囲み，ゲラゲラ，クスクス，ニヤニ

や、ともかくいろいろな笑いが起こるなかで、「商議」がなされたのだった。

そして、ぼくは少し心が動いてしまった。ホンジュラス製の「ソニー」を現物証拠付きの土産話として買っていてもいいかもしれない・・・、などと思ったりもした。そうしたほのかな購買意欲が続いたのも、この商人がはじめに示した値段を聞くまでの話だったが。

もちろん、「定価」などはなかった。「商議」のヘゲモニー闘争の結果として値が決まるわけだが、それにしても最初の提示価格にたいして、「とんでもない！高すぎるぞ！」とぼくは叫んでしまった（周囲の観客もぼくの抗議に同意していたから、とてつもない値段だったんだろう）。もしかすると、「日本人」の足下を見られたのかもしれない。

ところでこの出会いのさい。「越境」はどういったものだったか、をぼくは今考えてみようとしている（今、というのは、そのとき「越境」なんてことは少しも頭に浮かばなかったからだ）。

ソニーやイタチといったブランド・ネームも含めたモノ、それを運んで売り捌こうとする男たち・女たち、キョロキョロと店をのぞき込むぼく。すべてが「越境」のもたらしたものだと言おうとすれば、できないことはないだろう。「日本人」トジョタ・ニッサン・ソニーとをむすびつける発想に、資本のグローバル化の運動様態や帝国主義の国境を越えた展開を見出して、（自己批判的に）問題化することも可能だ。あるいは、内戦のさなかでせつせと「密輸」に骨折った彼——商人——に、「越境を生きる民衆」の粘り強いあり方を看取することもできるかも

しれない。

だが、そうして美化や抽象化を経ないと迫ってこないような「片思い」は、やめにしよう。空虚をイデオロギーで埋めるような振る舞いは不要なのだから。これは、「生きられた世界」を内側からいかに解釈しようとしても、そのやり取りにかかわる人びとが、それぞれのイデオロギー的非拘束性のなかで。「自ら自由に決意した」と誤認して「ひとりでに働く」あり方（エージェンシー）を衝き動かす力が見えてこないから、ではない。

人は動いて生きる。たしかにその移動はさまざまな力によって制限され、規定されるだろう。しかしシステムに役割規定された行為当事者（エージェント）として人が存在すること、あるいは、自由に戦略をこらし越境する主体（サブジェクト）として人が生きることそのどちらにも還元しえない「異なる領域」を生み落とすような、非決定的な動きのなかで出会いがある。その出会いは、自分から離れたどこか——「あそこ」「そちら」などなど——ではなく、自らを幾重にも過っておこりうる。そうした、ただ単に生起する運動を、ぼくは越境と呼びたい。

それにしても、あの「ソニーのコンボ」を値切りに値切って買おうとしなかったのは、ぼくの人生のなかで失敗だったのか成功だったのか。あのとき財布の中にあった金は、昼飯代と交通費程度しかなかったから、商人の熱弁がいかにもすぐれた芸の領分に至ったとしても、ぼくには「ソニー」を買えはしなかった。にもかかわらず、何となく惜しいことをしたという気持ちが、今も残っている。